

書評：英文解釈教室

-英語講読の指導に向けて-

塚本 亜美*

Book Review: English Interpretation Classroom -For Teaching English Reading -

Ami Tsukamoto*

This is a book review of Kazuo Ito's "Eibunkaishaku Kyoshitsu (English Interpretation Classroom)". The reviewer is in charge of helping 5th-year technical college students comprehend long texts, and finds it difficult to get students to read long texts in English. The reading materials used in class have a large number of words, and to makes matters worse, many of the sentences are long. Modifiers, parenthetical phrases, and parenthetical clauses are added to the basic elements, and the sentences become lengthy. While increasing one's vocabulary knowledge stands to be an important goal towards effective reading comprehension, for those lacking in vocabulary, sufficient comprehension can still be achieved by understanding the fundamental grammatical characteristics of English. The book provides a detailed analysis of the structure of such complex English sentences. In order to read long English sentences, it is necessary to increase the knowledge of subjects and verbs, objects, inversions, and modifiers.

1. はじめに

これは伊藤和夫著「英文解釈教室」の書評である。評者は高専の高学年を対象とした長文講読の授業を担当しているが、英語の長文を学生に読ませることの難しさを感じている。授業で扱う読み物は語数が多いばかりでなく、一つの英文が長いのである。語学教育の現場では、読解力を上げるには多読をすればいいという意見もあるが、英文を読むことが苦手な学習者にとってそれはハードな勉強方法である。語彙力を上げることも効果的な学習法ではあるが、一方で英文の特徴を心得ておくことで、英文を効率良く読むことができる。基本要素に修飾語や挿入句、挿入節が加わって、英文は長くなるのである。本書はそういった複雑な英文の構造を詳しく分析している。評者はその英文解釈の知識を講読の授業に取り入れたいと考えている。

2. 構造分析

評者は新居浜工業高等専門学校において、5年生に時事英

語という科目を教えている。この科目では、日本の代表的英字新聞の一つであるThe Japan News紙から抜粋した国内外の記事を講読する。学生たちは英字新聞を読みながら文中の単語・熟語・構文を習得していく。科学技術や産業、健康、文化、歴史についての記事を読むことで世界情勢に対する視野を広げながら、英文読解の能力を高めていくことを目指している。4年生までの英語講読の授業では、学生に長文の講読をさせているのだが、一方時事英語の授業では学生に英文の構造分析をさせている。

構造分析を簡単に説明すると、一文の中の主語・動詞、目的語・補語・修飾語句を見つけることである。英文法の世界では、前述したそれぞれの文の要素をS, V, O, C, Mとアルファベット一文字で表す。高校一年生の英語で最初に習う、5文型で用いられる要素である。5文型の説明で出てくる例文とは異なり、時事英語で扱う英文は一文が長く、その構造はもっと複雑である。長い英文の中でどこが主語でどこが動詞であるのか、すなわち文の骨組みを見極めることは、英文の身を解釈する上で重要なことである。

令和4年10月27日受付 (Received Oct. 27, 2022)

* 新居浜工業高等専門学校一般教養科 (Department of General Education National Institute of Technology (KOSEN), Niihama College, Niihama, 792-8580, Japan)

ところが学生たちにとって、The Japan Newsの英文の構造を分析するのは容易なことではない。なにしろ彼らが読むのは英字新聞の記事であり、その難易度は低学年の学生が読んでいる検定教科書のそれとは格段に違う。中学レベルの英語力しかない学生は、英文における主語は必ず文頭にあると考えるだろう(疑問文はそのかぎりではないが)。しかし、学年が上がるにつれ英語の授業で扱う英文は長く複雑になっていく。おまけに新居浜高専に在籍する学生の英語の実力についてはかなりの個人差がある。例えば、以下の英文はMeet the World 2022という教科書の中に出てくる一文である(若 有 2022)。これはJapan Newsの記事が掲載されている教材である。この文にある主語と動詞を判別できるだろうか。

- (1) Within the three-dimensional space, which resembled a theater, about 50 people including students controlled their own avatars to move and look around.
劇場に似ている三次元空間においては、学生を含む約50名の人々が動いたり見回したりするのに、自身のアバターを操作した。

和訳を参考しなかったら、前置詞句の中にある名詞句、the three-dimensional spaceを例文(1)の主語だと勘違いする者もいるだろう。前文で抜き出したのはあくまでも前置詞句、すなわちM(修飾語)にすぎない。では、主語はa theaterなのだろうか。いやそれも違う。which resembled a theaterはあくまでも関係詞節、すなわちこれもMにすぎない。about 50 people(約50名の人々)が主語である。それではその主語に対する述語動詞はどれだろうか。about 50 peopleより前にあるresembledはMの一部であることは判別できたとして、後続のincluding, controlled, move, look aroundのうち、どれが答だろうかという話になる。includingは単独では述語動詞にはなりにくい。moveとlook aroundはto不定詞の一部である。ゆえにこの文の述語動詞はcontrolledということになる。その直後にtheir own avatarsという目的語を置いている。以上のような説明を、この「英文解釈教室」という書籍が例文を用いて解説してくれる。

3. 英文の構造

3-1 主語と動詞

「英文解釈教室」の第一章は主語と動詞に関する章である。本書によると、主語と動詞の結びつきを見つけることが、英文を形の上から考えていく上で何より重要であると述べられている(伊藤和夫 2017)。この章では、文の初めに出てくる、前置詞の付いていない名詞を主語(主部の中心となる語:S)と考えてこれを探していく作業をしている。以下に具体的な例文を挙げる。

- (2) The house stands on a hill.
(3) In the house stands a man.

例文(2)の構造を分析するのは容易なことである。この文の主語はthe houseであり、動詞はstandsである。例文(3)は前置詞句で始まる例文だが、前置詞句がMであると考え、主語がa manであると判別できる。The houseという名詞はあくまでも前置詞の一部である。これは倒置用法であり、主語が文頭に来ない例である。

次に、評者が英語講読を教える際に重要だと思うのは主語だけでなく、それを含む主部がどれであるかを判別することである。それを見極められないと、主部の中にある動詞(の変化形)を、英文の主語に対する述語動詞だと勘違いしかねない。以下に二つの例文を挙げる。

- (4) The freshness of a bright May morning in this pleasant suburb of Paris had its effect on the little traveler.

この心地よいパリ郊外の5月の明るい朝のさわやかさが、小さな旅人に影響した。

- (5) Anyone having difficulty in assembling the machine may have the advice of our experts.

その機械が組み立てられない方には、どなたでも当社の専門家が教えいたします。

(4)の例文は長い主部The freshness of a bright May morning in this pleasant suburb of Parisの中にfreshnessという主語があるという構造であり、その主語に対する動詞はhadである。主部の中に動詞がないため、動詞を判別するのは比較的容易である。次に(5)の例文を見てみよう。この例文の主語はanyoneで動詞がmay haveである。しかしながら主部がhavingとassemblingという二つの動詞(の変化形)を含むため、学生はanyoneに対する動詞が何であるかを見誤りやすい。著者はこのことについて、「Anyone=S、having=Vと感じられないのはなぜだろう。動詞の-ing形はそれだけでは主語を受ける述語動詞として用いることができないという約束があるからである」と解説している(伊藤 2017 pp. 2-3)。伊藤はその他にも、to不定詞や過去分詞もそれだけで主語を受ける動詞として用いることができないと述べている。このことは、2章の例文(1)にあるincludingおよびmove, look aroundが、主語about 50 peopleを受ける動詞ではないことの説明である。

3-2 目的補語

英文解釈教室の第3章に出てくるのは目的補語である。目的補語というのは、一般的な英文法で言うところの補語

(C)のことである。高校一年レベルで勉強する5文型のいわゆる第2文型(SVC)と第5文型(SVOC)の中に構成要素

の一つとして含まれている。学校の英語の授業で補語を教わる時、それは名詞や代名詞、形容詞であることが多い。以下に、ベストセラーの英文法書である総合英語Evergreenの例文を挙げる（川崎他 2017）。

(6) His mother is a lawyer.

S C

彼のお母さんは弁護士である。

(7) The news made us sad.

O C

その知らせに私たちは悲しくなった。

例文(6)がいわゆる第2文型で、例文(7)が第5文型である。総合英語Evergreenによると、主語や目的語が「どういうものなのか」あるいは「どういう状態にあるのか」を説明する、文が成り立つために必要な語を補語と呼ぶ（川崎他 2017 p. 15）。例文(6)ではS=C、例文(7)ではO=Cという関係が成り立つ。学生たちは概ねここまでの知識は持っているが、英文解釈教室によると、補語になるのは名詞・形容詞とそれに相当する語句だけではない。補語には不定詞・分詞および前置詞で始まる句も含まれると、本書では説明している（伊藤 2017 pp. 21-22）。以下にそれらの例文を挙げていく。

(8) The ideal society will **enable** every man and woman *to make* the best of their inborn possibilities.

理想的な社会では、すべての男女が天与の能力を十分に活用できるだろう。

(9) I **heard** him *calling* my name.

私は彼が私の名前を呼ぶのを聞いた。

(10) President Lowell of Harvard University once **defined** a university *as a place* where nothing useful is taught.

ハーバード大学のローウェル総長はかつて大学を定義して、実用的なことは何ひとつ教えられない場所であると言った。

いずれの例文においても動詞は太字で表されている。例文(8)は補語が不定詞になる例であり、斜体のto makeがそれにあたる。(9)は近く動詞hearを用いた英文であるが、この文では現在分詞のcallingが補語に当たる。いずれの英文においても、目的語が（それぞれevery man and womanとhim）補語（それぞれto makeとcalling）の意味上の主語の役目を果たしている。さらに難解なのが、目的語の直後に挿入句が挟まる例である。例文(10)のas a placeは一見すると前置詞句、すなわちMのように思えるが、伊藤によると前置詞を伴う補語ということである（伊藤 2017 p. 27）。ここまではまだ理解しやすい例文であるが、学生にとって難解なの

は目的語と補語の間に挿入句がある英文である。以下がその一例である

(11) I have **heard** a man, for lack of anything to boast about, boasting that his cat eats cheese.

私はある男が、特に自慢することがないので、自分の猫はチーズを食べると自慢しているのを聞いたことがある。

例文(11)では下線部の前置詞句が挿入句、すなわちMである。知覚動詞hearを使った構文である。目的語のa manがboastingという動詞の意味上の主語に当たるが、a manとboastingが離れているので、その事実を判別しづらい。a manに対応する動詞が下線部上のto boastだと勘違いをしてしまう可能性がある。そういった誤りを避けるために、学習者はカンマとカンマで区切られた部分がMであることを念頭に置いて読むべきである。

3-3 倒置

学生が英語の授業で読む英文の中でも、最も難解な構文の一つが倒置の英文だろう。伊藤は倒置について、本書で次のように述べている。原則的な語順は文の5文型の示すところであるが、「例外のない規則はない」ということわざもあるように、この大原則に対してもいくつかの重要な例外、すなわち語順の倒置がある（伊藤 2017 p. 78）。日本人が高校レベルでまず習う倒置の代表的な構文は否定文である。それは否定の副詞+助動詞+S+Vという構造になる。

(12) Never **did** I dream of it.

私はそんなことを夢にも思ったことがなかった。

この例文を別の書き方で表すと、I never dreamed of it.となる。倒置用法では、動詞のdreamが原形になり、過去形の助動詞didが主語の前に来る。以上の変形は平叙文から疑問文を造る場合の語順変更と同じであると、伊藤は述べている（伊藤 2017 p. 78）。この例文はまだシンプルなので理解しやすいが、構造が複雑になってくると英文の中のどの部分が主語なのか判別しづらくなっていく。以下の例文を見て、英文の中の主たる主語（主節の主語）が何かを考えてみよう。

(13) **Not** until all attempts at negotiation had failed *did* the men *decide* to go on strike.

交渉の試みがすべて失敗した時になって初めて、人々はストライキに入ることを決定した。

こちらも倒置構文であるが、主語の判別がしづらい。この例文を別の書き方で表すと、次のようになる。The men did not decide to go on strike until all attempts at negotiation had failed.この文からわかるように、例文(13)の主語はthe

menであり、notが文頭に出されている。さらにuntilで始まる節がその直後に続いている。倒置構文の元の形、すなわち別の表し方を考えることが、倒置構文の構造を理解する上で大切である。次に挙げるのが、M+V+Sの倒置構文である。

(14) **More important** than the invention of new machines, **is** the creation of new mental attitude.

新しい機械を発明することより重要なこととして、精神の新しい態度を創造することがある。

例文(14)の動詞がisだとしたら、それに対応する主語はどれに当たるだろうか。the invention (=S) … is (=V) という解釈をすると、thanが文末のattitudeまでをまとめることになり、than以下に対する主節がなくなってしまう。この例文を次のように書き換えると、the creationが主語であることが判る。The creation of new mental attitude is more important than the invention of new machines.

次に、目的語が文頭に出されたO+S+Vの倒置構文を紹介する。まずは倒置の文と比較するために以下の例文を読んでみる。

(15) **One thing** my father left to me **was** more valuable than a good fortune.

父が残してくれたものの一つは多額の財産より貴重であった。

この場合、太字で書かれたone thingはone thing my father left to meという主部の一部であり、目的語ではない。one thingとmy fatherの間には目的格が省略されている。よってこの例文は倒置を用いた英文ではない。それでは以下の例文の構造はどのように分析できるだろうか。

(16) **One thing** my father left to me **and it** was more valuable than a good fortune.

父が残してくれたものの一つがあったが、それは多額の財産よりも貴重なものであった。

その直後に続く述語動詞がないので、one thing my father left to meを例文(16)の主部であると判断することができない。接続詞のand以降にあるwasはあくまでもitに対応する動詞である。最初の文節を、My father left one thing to meと並べ替えることができる。動詞leftの後に続く目的語のone thingが前に出されたのが例文(16)なのである。これはO+S+Vの倒置の用例である。and itの存在を無視してしまうと、「父が残してくれたものの一つは多額の財産より貴重であった。」と、(15)の例文の和訳と同じ訳をしてしまう恐れがある。「文頭にある前置詞のついていない名詞が主語でない場合は、目的語が先頭に出た構文ではないかと考えて、あとに目的語を持たない動詞・前置詞を探すのがこの構文の考え方である」と伊藤が述べている(伊藤 2017

p. 88)。

英語の授業で倒置を教えていると、それでは普通の英文倒置を用いた英文に、どういったニュアンスの違いがあるのかという質問が出る。大西(2020 p. 338)によると、文を構成する語の順番を変えることには大変重要な意味がある。I am thirsty.という英文には「のどが渇いています。」という意味がある一方、Am I thirsty!という英文は「のど渇いたあ!」と和訳される。後者は倒置の構文であり、疑問文ではない。I want something to drink now! (今すぐ飲み物が欲しい!)などがすぐに続きそうな、大きな感情の動きが感じられる文なのである。感情の動きを表すのが倒置用法のニュアンスの特徴である。否定文に倒置用法が多いのも、否定表現には激しい感情の動きが伴うからである。

3-4 意味上の主語

英文解釈教室の第8章では意味上の主語について論じている。本章では、S' が意味上の主語、P' が意味上の述語を表す記号である。まず初めにS' +to不定詞の構造から導入されている。これはto不定詞の前にforで始まる前置詞句がある構文で、高校の英語で習う文型である。本章では次の二文を比較している。

(17) Here is a book for a student. …(a)
Here is a book for a student to read. …(b)

(a)ではfor a studentはa bookにかかり、「こちらは学生のための本である」という和訳になる。一方(b)は、「こちらは学生が読むべき本である」という意味である。直後にto readが続いた途端その前置詞の役目が変わり、(b)ではfor a studentが意味上の主語に、to readが意味上の述語となる。学生にとっては中学校で習う(a)の用例の方になじみがあるので、(b)のように前置詞句の後ろにto不定詞を伴う英文は解釈しづらい。例文(17)はまだシンプルな英文だから読解しやすいが、以下の例文のように構造が複雑な英文になると読解が困難になる。

(18) It is a plain and simple duty **for those** who wish to act rightly, and who have realized their limitations, **to refuse** great positions humbly and seriously, if they know that they will be unequal to them.

自分が高い地位にふさわしくないと知っている場合、その地位を謙虚かつ殊勝に固辞することは、正しく行動することを願う自己の限界を知っている人の明白単純な義務である。

例文(17)と同様に、この例文もa plain and simple dutyという名詞句の後ろにforで始まる前置詞句が続いている。しかし、そこからto refuseまで離れているので、これがS' +to不定詞の構文であることを判別しづらいかもしれない。まず

those who ...というのはpeople who ...という表現とほぼ同義であり、この場合thoseは「あれら」という意味の指示語ではない。who wish to ...とwho have realized ...は関係代名詞節の羅列であり、等位接続詞のandで結ばれている。これらの関係代名詞節はthose（人々）を後置修飾している。この例文ではS' は人々であり、P' はto refuse（固辞すること）である。最後にあるif they ... themは条件節である。関係代名詞節内のto actをP' であると誤読してはならない。

次にS' +動名詞の用法について論じる。新居浜高専には、動名詞とは何かという基本的な文法知識からして心もとない学生が散見される。彼らには動名詞と進行形を混同してしまう恐れがあり、動名詞が目的語あるいは所有格の意味上の主語になる用法を見ると誤訳をしてしまう恐れがある。動名詞の意味上の主語は、代名詞の時や人を示す名詞の時は所有格または目的格、物を表す名詞の時は目的格を動名詞の前に置くことによって示すのが原則である（伊藤 2017 p. 152）。誤訳を避けるためには、この原則を学生にしっかり教えておく必要がある。以下はS' +動名詞の比較的解釈しやすい例文である。

(19) I want to satisfy myself about **their** being able to meet this demand.

彼らがこの要求に応じることができるかどうか確かめてみたい。

この例文を別の表現に書き換えると、I want to satisfy myself that they are able to meet this demand.となる。所有格theirの直後に動名詞のbeingが続くという、判かりやすい例文である。theirの意味上の主語になるため、be able toのbeの部分が動名詞になるというわけである。これが以下の例文のように現在完了形を用いた用法になると、それを読解する学生の頭もこんがらがってくるが、このような英文は少なくとも使用教材であるMeet the World 2022の中には滅多に登場しない。

(20) The first proof of **man's** having uncovered one of the inmost secrets of the universe was the making and using of a horrible weapon of mass destruction.

人間が宇宙の内奥の秘密の一つを発見したことの最初の証拠は、大量殺りくの恐るべき武器の製造と使用があった。

3-5 修飾語の位置

高専の高学年の教科書には、前述した例文(1)のように、主語が文頭に無い長い英文というものが頻出する。Meet the World 2022もまた然りであり、パッセージの内容はそういった例文の連続である。英文の基本的な構造を人体にたとえると、主部が頭であり述部が胴体である。そしてMはそういった骨組みにくっ付いている肉のようなものである。例文(1)では

within the three-dimensional spaceが前置詞句で、which resembled a theaterが関係代名詞節であるが、いずれの要素もMである。そして文の半ばに差し掛かってやっと主語のabout 50 peopleが出てくる。英文解釈教室では、そういったMの特性について詳細に説明している。

第10章の初めにH...(句)・・・Mの構造が出てくる。英文解釈教室では修飾される語句のことをHで表しているが、HとMの間に句が挟まる構造が紹介されている。以下、暗号付きの例文において太字の語句はMである。ちなみに句というのはその中にS+Vを含まないかたまりを指し、一方節というのはその中にS+Vを含むかたまりを指す。

(21) A baby is like **an explorer** in a new world, full of wonder and surprise at the novelty of everything.

新しい世界の中で、あらゆるものの珍しさに対する驚嘆の念でいっぱいになっている探検家に、幼児は似ている。

A baby is like an explorer in a new world, full of wonder and surprise.という文では、full of wonder and surpriseが直前のa new worldにかかる。a new world以下の部分は「不思議で人を驚かすものに満ちた新しい世界」と訳される。その基礎にはa world surprises an explorerがある。一方例文(21)では、full of...がかかるのはa new worldではなくan explorerなのである。the novelty of everythingは「(新しい世界の中の)あらゆるものの珍しさ」だから、a world surprises ... at the novelty ...という解釈は成立しない。

HとMが隣接している時、これらを結び付けて読むことは簡単である。a new worldの直後にfull of...が続いていたら、修飾関係が判りやすい。しかし、例文(21)のようにHとMが離れている場合は、その構造を把握するのは難しい。伊藤は「HとMが同時に目に入るだけの視野の広さを獲得することは、相当の修練があってはじめてできることである」と述べている（伊藤 2017 p. 186）。名詞の後から修飾する語句は形容詞や前置詞句だけでなく、不定詞・分詞・関係代名詞節など、種類も多い。学生が長文読解においてその様々なパターンを読解するのは、なかなか難しいことである。やはり伊藤が言うように、たくさんの英文を読んでいくことでこの構造に慣れていくしかないだろう。

次にHとMの間に節が挟まるパターン、H...(節)・・・Mの構文を見ていく。

(22) I travel because I like to travel. I like **the sensation** it gives you of freedom from all responsibility.

私が旅をするのは旅が好きだからである。旅が与えてくれる、すべての責任からの解放感が私は好きなのである。

二文目に注目する。the sensationとof freedom from all responsibilityの間に節、it gives youが挟まっている構造である。Mが短ければ... the sensation of freedom it gives youと

いうことができるが、例文(22)はMが長いので、それが節の後ろに回るのである。読み手である学生はH…(節)…Mの構造を判別し、**the sensation**が何の解放感あるかを読み解かねばならない。

HとMの間に関係詞節が挟まるパターンがある。関係詞節とは関係代名詞ないし関係副詞で始まる節のことである。以下にその一例がある。

(23) The English are conservative by nature, that is to say, having built **something**, whether it is a building, a custom or an institution, *that* is both satisfactory and beautiful, they are loath to do away with it.

英国人は生来保守的である。換言すれば、建造物でも慣習でも制度でも、満足すべき美しいものを作り上げた後は、それを破壊することを嫌うのである。

by natureは「生まれつき、生来」、that is soは「言い換えれば」という意味である。Havingは分詞構文で、whether it is ...はhaving builtにかかる副詞節である。somethingとthat is ...beautifulの間にはwhether it is ...という関係詞節が挟まっている。thatは制限用法の関係詞である。The English are ... that is to say, ..., they are loath ... がこの文の骨組みである。評者こういった英文を教える時、下線部whether it is ... an institutionの前後に付いている二つのカンマに着目させる。一見すると見落としがちなこの点に重要な役割があり、挿入節の出発点と終点にそれを置くことで、その部分の範囲が明確になる。英文を板書する際に注目すべきカンマを赤い文字で書くと、それを目立たせることができる。

最後に、H[S]+V…Mの構文を説明する。修飾される語が前置され、それとS+Vの後にMが来るパターンである。

(24) Perhaps **that** is the wisdom of life, *to follow* in your father's steps and look neither to the right nor to the left.

父と同じ道を歩んで、右も左も見ないようにすることは、世に処する方法としておそらく賢明なことであろう。

It is the wisdom of life to follow in your father's steps.という文と比較してみる。Itが形式主語、to follow...は真の主語であるが、この英文を変形したのが例文(24)である。この英文ではto follow...がかかるのはthatである。高専で扱う教材では、形式主語のItで始まる構文の方はよく出てくるが、例文(24)のようなthatを形式主語とした構文は全然見かけない。学生がこの例文を読んだら、thatを指示語であると勘違いしてしまうだろう。構造の判かりやすさでいえば、次の例文の方が説明しやすい。関係詞節が離れた位置にある名詞を修飾する例である。

(25) In the eighteenth century, a new **attitude** of mind was spreading among thoughtful people *which* was to

influence every aspect of life.

芸術が単に自然の姿を記録するものにすぎないとしたら、自然に一番近い模倣が最も優れた芸術作品ということになり、写真が絵画にとって代わる時代が急速に近づきつつあるということになるであろう。

was to-は「予定」を示す。which wasの先行詞が単数形の「物」でなければならないと考えると、関係詞節が修飾するのがa new attitude of mindであることが判かる。これは根拠を明確に説明できるという意味で良い例である。

4. 終わりに

語彙力を高めることと文法を勉強することが、英語力向上のための基本的な勉強方法である。英文解釈教室が教える構造分析は、そういった勉強方法のさらに先にある知識であると評者は考える。

5年生の時事英語で扱うテキストには、2年生までで使用する検定教科書と違って、大学レベルの英文が掲載されている。日本で発行されている英字新聞、The Japan Newsの記事をおそらくほとんどそのまま採用していると推測される。この新聞の読者は外国人や高い英語力を持つ日本人であることが想定される。高専生は新聞記事を読むことで、まさに生の英語に触れるのである。

時事英語の授業では、学生に英文の和訳はさせず、代わりにその構造を分析させることにしている。主語、動詞、そして修飾語と修飾される語句について、学生に質問をしている。長い一続きの英文の骨組みを学生に理解させるために、評者は教師としてどう教えるかを自問している。そして自己の専門知識をブラッシュアップするために、本書を読むことにした。本書は昭和期の伝説的な予備校講師によって書かれ、現代においても難解な英文を読み解くためのバイブル的な参考書として、多くの学習者に読み継がれている。特に、修飾語の様々なパターンと豊富な用例は、受験英語や英語圏の読み物を読解するための、良い練習問題となるだろう。

参考文献

- [1] 伊藤和夫:「英文解釈教室」、研究社出版、(2017)
- [2] 大西泰斗・ポール・マクベイ:「総合英語 FACTBOOK」、桐原書店、(2020)
- [3] 川崎芳人・久保田廣美・高田有現・高橋克美・土屋満明・ガイ・フィッシャー・山田光:「総合英語 Evergreen」、いづな書店、(2017)
- [4] Y. Wakaari: "Meet the World 2022", Seibido, (2022)